

鳥取城調査研究年報

第9号

2016.3

鳥取市教育委員会

鳥取城調査研究年報 第9号【鳥取城周辺の文化財】

市指定文化財 樽嶽グランドアパート

例 言

- 1 本書は、鳥取市教育委員会による鳥取城跡に関連する調査研究成果を報告するものである。
- 2 今号は、号外として、鳥取城跡・太閤ヶ平の所在する久松山系のうち、鳥取東照宮の門前町にある建造物のため、「鳥取城跡周辺の文化財」として、平成28年2月29日に鳥取市指定保護文化財として指定を受けた、楞谿グランドアパートに関する文化財調査の成果を報告する。
- 3 この調査は、平成26年度に委託事業として建造物調査を実施し、鳥取市文化財審議会の指導により平成27年度に補足調査を実施したものである。
- 4 調査体制は下記の通りである。
調査担当 有限会社 木下建築研究所（木下正昭・上山善博）
実測・図面作成協力 上田建築研究室（上田芳一）
調査指導 鳥取市文化財審議会（会長 星見清晴／現地指導 浅川滋男・岸本 寛）
鳥取県教育委員会文化財課（松本絵理）
鳥取市教育委員会文化財課（佐々木孝文）
- 5 本書の執筆・編集は、鳥取市教育委員会文化財課（佐々木孝文）及び受託者である有限会社 木下建築研究所（木下正昭・上山善博）があたった。
- 6 本報告書に係る著作権は、鳥取市教育委員会に帰属する。
- 7 本報告書の作成にあたって、下記に名前を掲載した方をはじめ、多くの方々にご指導・助言・ご協力をいただきました。この場を借りてお礼申し上げます。

協力者（順不同・敬称略）

佐々木芽子・松本泰造・檜山二三衛・檜山真由美・檜山哲広・白田季微子・中山 晃
福田勝美・田中敏明・赤堀達男・山本初雄・大坪省三
上田芳一（上田建築研究室）・木谷清人（鳥取市歴史博物館）

主要参考文献

生田昭夫[ほか]『鳥取建築ノート』（朝日新聞鳥取支局編、富士書店、1991）
『鳥取県の近代化遺産 近代化遺産総合調査報告書』（鳥取県教育委員会、1998）
小泉和子[ほか]『占領軍住宅の記録』上・下（住まいの図書館出版局、1999）

鳥取城調査研究年報 第9号【鳥取城周辺の文化財】
市指定文化財 栲谿グランドアパート

目次

栲谿グランドアパートの概要	…… 1
建造物調査報告書	…… 3
（1）建造物の概要	…… 4
（2）創建と沿革	…… 5
（3）建物の履歴	…… 6
（4）図面	…… 7
（5）写真	……17
（6）建築の特徴	……20
（7）保存上の留意事項	……25
附録 指定文化財調査	……26

鳥取市指定文化財 「樗谿グランドアパート」の概要

1 文化財指定までの経過

樗谿グランドアパートは、従来から、『県民の建物百選』調査、『鳥取県の近代化遺産』総合調査、『鳥取建築ノート』等で高く評価されてきた建築物である。

当初の建物は洋風の意匠が加えられた日本建築で、鳥取市街の近代化の様相を端的に示している。進駐軍の宿舎として建築された増築部分は、構造・仕様ともに規格化された進駐軍宿舎の建築で、数少ない古蹟期の遺構である。メキシカン・オーダーの柱頭など、一部規格化された宿舎と異なる意匠が使用されている点に特徴がある。

進駐軍より施主・佐々木家に返還された後は、アパート、住居として利用・維持されていたが、居住していた前所有者の死去に伴い、居住者が不在となった。現在は、アトリエとして2部屋が貸し出されている。

平成10年度 県民の建物百選に選定

平成26年度 建造物調査を実施

平成27年10月～11月 審議員による現地調査

平成27年12月 所有者の申請書・同意書を受領

平成28年2月 鳥取市文化財審議会で諮問・答申

平成28年2月29日 告示

2 文化財の概要

名 称	樗谿グランドアパート
所 在 地	鳥取市上町93番地1
所有者	佐々木冴子
建 築 主	佐々木善政
設計・施工	楢山義治
工事着工年	昭和2年
建築年代	当初建物：昭和5年（1930年） 増築部分：昭和21年（1946年）
敷地面積（公簿）	442.64㎡
床面積（実測）	当初建物 237.62㎡ 増築部分 89.13㎡ 延面積 326.75㎡
建築面積（実測）	199.89㎡
構 造	木造2階建 当初：和小屋 増築部：洋トラス
屋 根	日本瓦（津ノ井瓦）土葺き切妻屋根 7寸勾配
外 壁	モルタル粗ドイツ風仕上 白ペンキ

3 文化財の現状

	現 在
管理者と維持管理	所有者により可能な範囲で管理されている。所有者は遠隔地に居住しているが、一部の部屋がアトリエとして利用されており、使用者が日常の管理を行っている。
環境整備	所有者により可能な範囲で管理されている。アトリエの使用者が日常の管理を行っている。
活 用	外観が目立つため、樗箒のビュースポットとなっている。 アトリエとして2室が使用されており、当初部分の一室は所有者の帰省時の居住空間として利用されている。 かつては芸術家のアトリエやタウン誌の編集部として利用されていた。

4 文化財の価値

- ・当初建築部分が、洋風の意匠をもつ木造建築としては、市中心市街地では仁風閣に次いで建築年代の古いものであること。
- ・進駐軍による増築部分についても、意匠面等に建物特有の独自性が加えられていること。
- ・進駐軍の接収による改修・増築部分についても、他にこのような遺構が残されておらず、市の歴史を知るうえで貴重であること。

5 指定後の保存・活用

- ・指定文化財としての価値を高めていくため、市民グループや文化団体等と協力し、活用・広報に努める。
- ・管理は当面従来通り所有者による。
- ・歴史博物館、東照宮等、周辺の施設や文化財と一体となった活用方策を検討する。



建造物調査報告書

(1) 建造物の概要

名 称	楞齋グランドアパート		
所 在 地	鳥取市上町 93 番地 1		
建 築 主	佐々木善政		
設計・施工	当初建物	檀山義治	
	増築部分	不明	
工事着工年	当初建物	昭和 2 年 (1927 年)	
	増築部分	不明 (昭和 20 年以降)	
建築年代	当初建物	昭和 5 年 (1930 年)	
	増築部分	昭和 21 年 (1946 年)	
床 面 積 (実 測)	当初建物	1 階	1 3 6 . 3 5 m ²
		2 階	1 0 1 . 2 7 m ²
		計	2 3 7 . 6 2 m ²
	増築部分	1 階	4 4 . 8 3 m ²
		2 階	4 4 . 3 m ²
		計	8 9 . 1 3 m ²
	延床面積	3 2 6 . 7 5 m ²	
建築面積 (実 測)	1 9 9 . 8 9 m ²		
構 造	当初	木造 2 階建 和小屋	
	増築部	木造 2 階建 キングポスト・トラス	
軒 高	当初	7 . 2 3 m	
	増築部	6 . 4 7 m	
屋 根	日本瓦 (津ノ井瓦) 土葺き切妻屋根 7 寸勾配		
外 壁	モルタル粗ドイツ風仕上 白ペンキ		

(2) 創建と沿革

佐々木家住宅の当初部分は、昭和2年に建築がはじまり、庭などの築造を含め昭和5年に完成したものである。施主は智頭町木ノ原在住の山林地主で八頭郡議員の佐々木善政氏（昭和18年没）、大正13年に長田神社が上町から現在地の東町に遷座した折、旧神地の一部を取得し敷地とした。場所は大工町頭から鳥取東照宮（樗谿神社）へ続く上町の通りの中ほどに位置し、吉村徳平によって公会堂（明治45年着工・大正2年完成・昭和30年取壊し）が建てられていた対面にあたる。

当初は医院として計画・建築したが、開業することはなくそのまま佐々木家の別邸として使用された。当初部分は、2階建のベランダ付の和洋折衷建築で、2階にロマンチックなベランダを設け、主屋根には津ノ井瓦を葺き、外壁はモルタル塗、ドイツ壁調に粗くして、縦長の窓が配置されている。南欧風ベランダコロニアル様式に近く、全体におおらかさが感じられる外観である。玄関ホールには他の建造物（明治44年建築の病院のものどされる）より転用した螺旋階段をしつらえている。普請道楽であった善政氏は、洋館の修業のため、市内茶町の大工橋山義治（明治20年～昭和37年頃）を京都に1年ほど留学させた上で工事に備えた。

完成後の昭和14年、国によって接収され、昭和27年に返還されるまで佐々木家の手を離れることとなった。後述する増築部分は、この間に施工されたものである。

昭和18年の鳥取大震災で建物が若干正面側に傾き、1階和室と廊下の間仕切の作り替えと屋根瓦の一部修繕等が行われた。終戦後の昭和21年、本建造物は進駐軍に接収された。この際、進駐軍の意向に沿って西側の庭園の池が埋められて、増築が行われた。増築部分は進駐軍のデペンデント・ハウスとして規格化された設計であるが、一階のベランダにはメキシカン・スタイルの柱頭飾りを設けるなど、指揮官のノーラン少佐の自邸に倣ったという独自の意匠をもつ。屋根を日本瓦で葺き、二階の階高を抑えるとともに、外壁の仕上げをドイツ壁に仕上げるなど、当初建物とのバランスに配慮した面がみられ、現在では一体的な外観を形成している。この時、当初部分の玄関右手2室の間仕切が取り除かれてダンスホールとして広げられ、応接室の白漆喰の壁には金髪女性のダンサーの画が描かれた。さらに、進駐軍の規格にあわせて、引き込み用の電源の容量が増やされ、浴室の電気ヒーターや、防犯用鉄条網への夜間電流に使用された。昭和24年から28年まで、1階はダンスホール、2階は宿舎として使用された。

その後、進駐軍から佐々木家に建物が返却され、時の当主・佐々木通元氏（善政3女・節子氏夫）は、昭和29年から約4年ほど、1階をダンスホール、2階をホテルとして経営したがそれ以降はアパートとして貸室とし、当初建物1階に居住した。通元氏の没後は、遠隔地に住む遺族により管理されている。

(3) 建物の履歴（所有者及び親族・関係者からの聞き取り）

- 施主の佐々木善政は茶町の大工榎山義治（明治20年～昭和37年頃）を洋館建築の修行の為一年ほど京都に留学させ、昭和2年に着工し昭和5年に完成する。木造日本瓦葺きで、2階にベランダを設けた南欧風擬洋風建築である。
- 初めは長女に養子をとって医院として計画したがかなわず、智頭木ノ原の別邸となる。＜当時洋館として武田医院（上佐々木家の親戚）がよくはやったせいで・・・＞
- 当初建物は木材も他の材料も贅沢な材で造られた。＜佐々木分家は山林地主でしかも那岐の杉は芯が紅色で冴がよく上品であること、又木ノ原のケヤキは智頭では一番良材ととれた所だと、東宇塚の赤堀達男さんが話しておられた＞
- 洋館である事によって昭和14年頃日本国に接収された。＜節子（善政三女）はけがで中国から帰ってきた通元氏と昭和12年～13年頃洋館の2階和室で見合いし結婚したが、しばらくして従軍記者として戦地に赴任した＞節子→冴子
- 洋館は1・2階共階高が高く天井高も3.3mと高い。内部のらせん階段を賛徳病院（明治44年頃）より移設したこともあり、それに合わせたとも考えられる。
- 日本軍に接収されていた頃の事がはっきりしないが、一説によると湖山に移転した満州重工業（グライダー工場）の社長（飯田氏）の宿舎になっていたという。
- 鳥取大地震（昭和18年）に見舞われ建物が正面に傾く等の被害を受けた。＜1階廊下と和室の間仕切り壁が造りなおされているのはこのためか＞
- 昭和21年再び進駐軍に接収され、山梨から赴任してきたノーラン少佐によって西側の池や庭を均して、自宅に似たスタイルの増築がなされた。終戦後で資材の調達が可能でなく木材や瓦等、良質の材料は使用できなかった。
- 昭和24年～28年迄1階をダンスホールに2階を宿舎として使用し、その際に1階の応接間と和室の間仕切りを撤去しホールとした。＜この頃ホワイトローズという呼称で利用されたとのこと＞
- 敷地周囲を有刺鉄線で囲み、夜間は高圧電流が流されていた。
- 昭和29年によく佐々木家に返還され、時の当主通元氏（善政三女・節子氏夫）によって4年間ほど1階をダンスホール、2階をホテルとして経営したがそれ以降はアパートとして賃貸とし、当初建物1階に居住した。

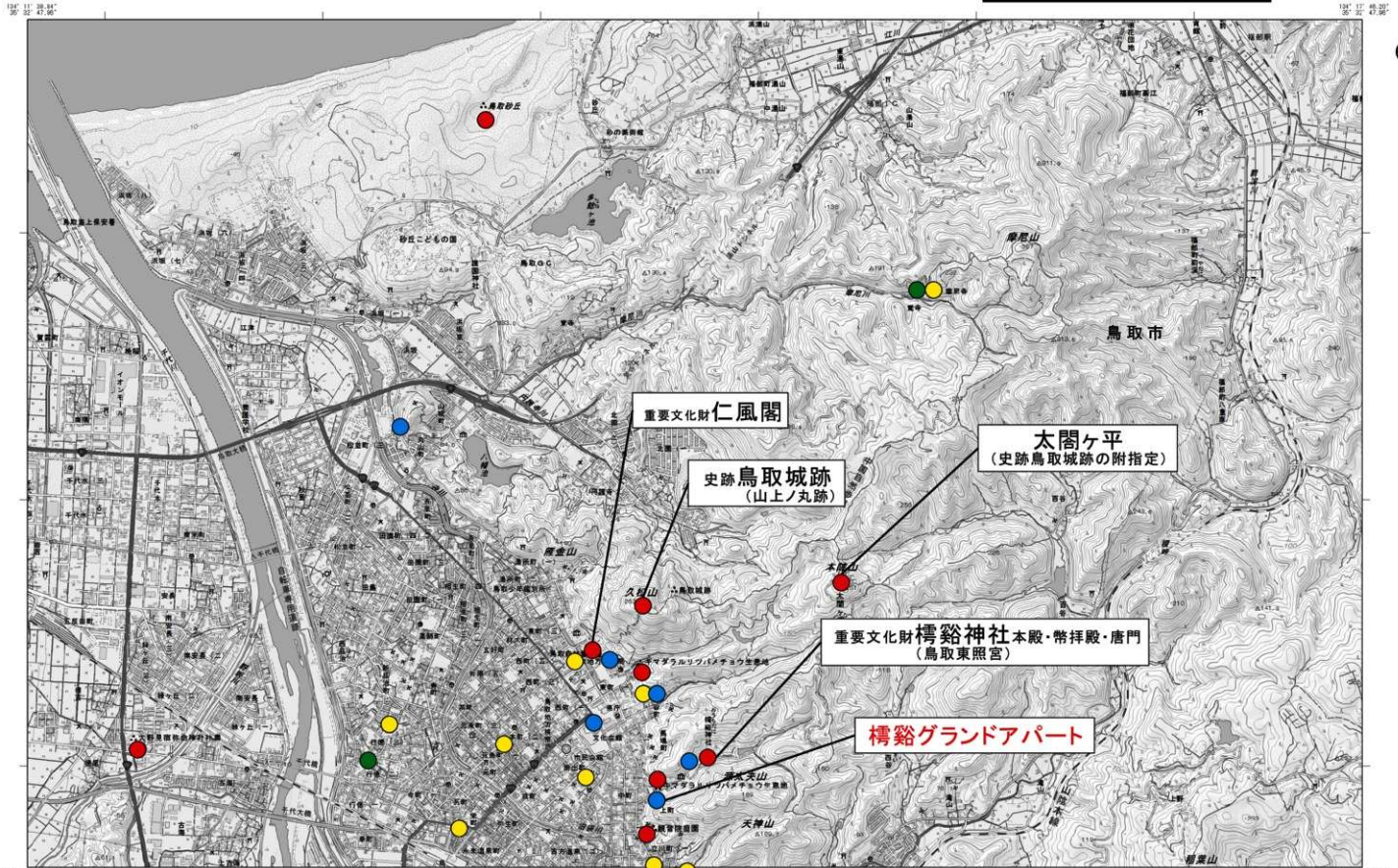
(4) 図面

番号	図面名	備考
1	所在地	
2	現況配置図	昭和 29 年以降増築部含む
3	〃 1 階平面図	一部 29 年以降増築部含む
4	〃 2 階平面図	
5	〃 立面図 1	
6	〃 立面図 2	当初部分 (昭和 5 年)
7	〃 断面図	増築部分 (昭和 21 年)
8	〃 仕上表	

所在地

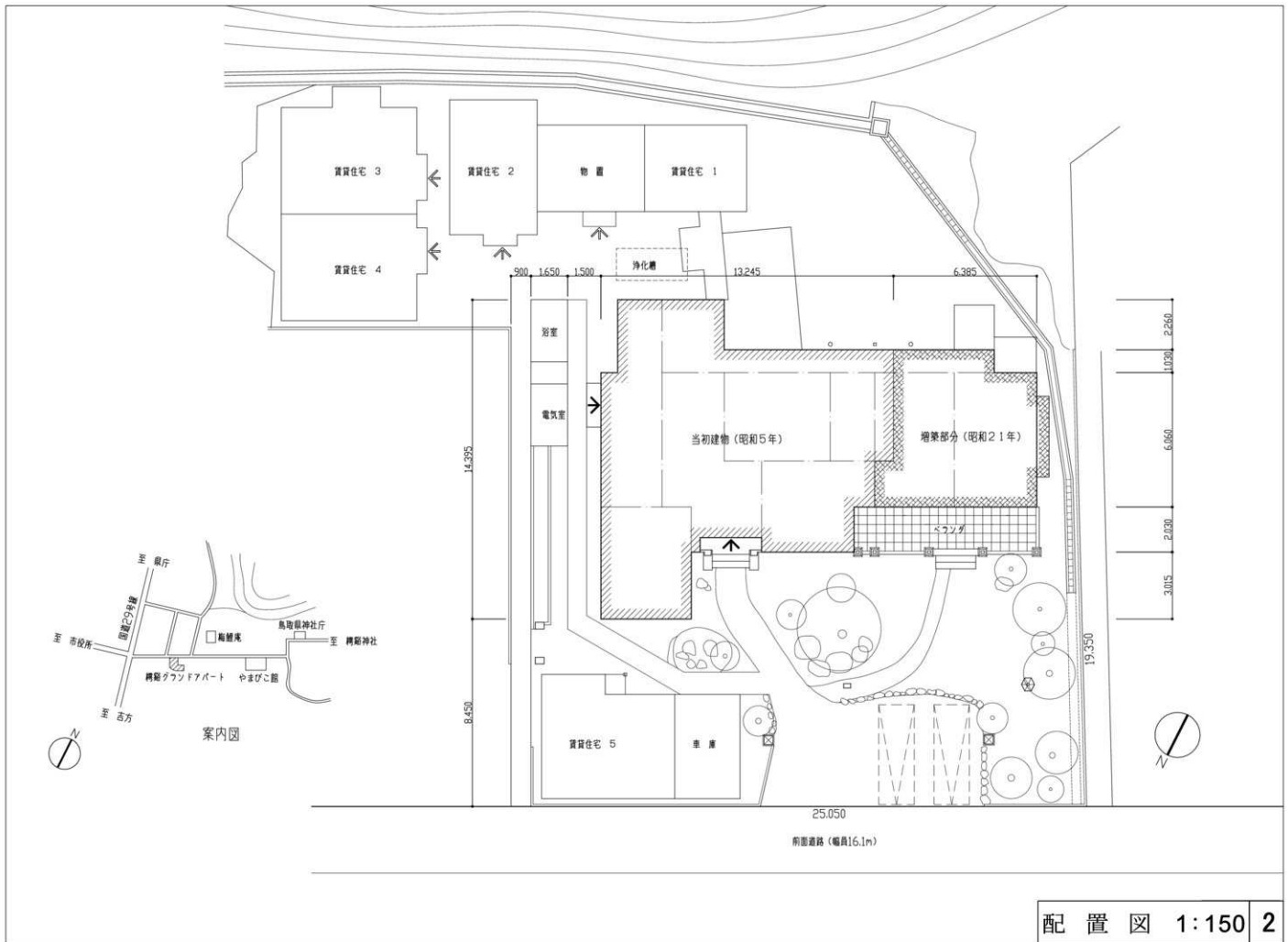
久松山周辺の文化財

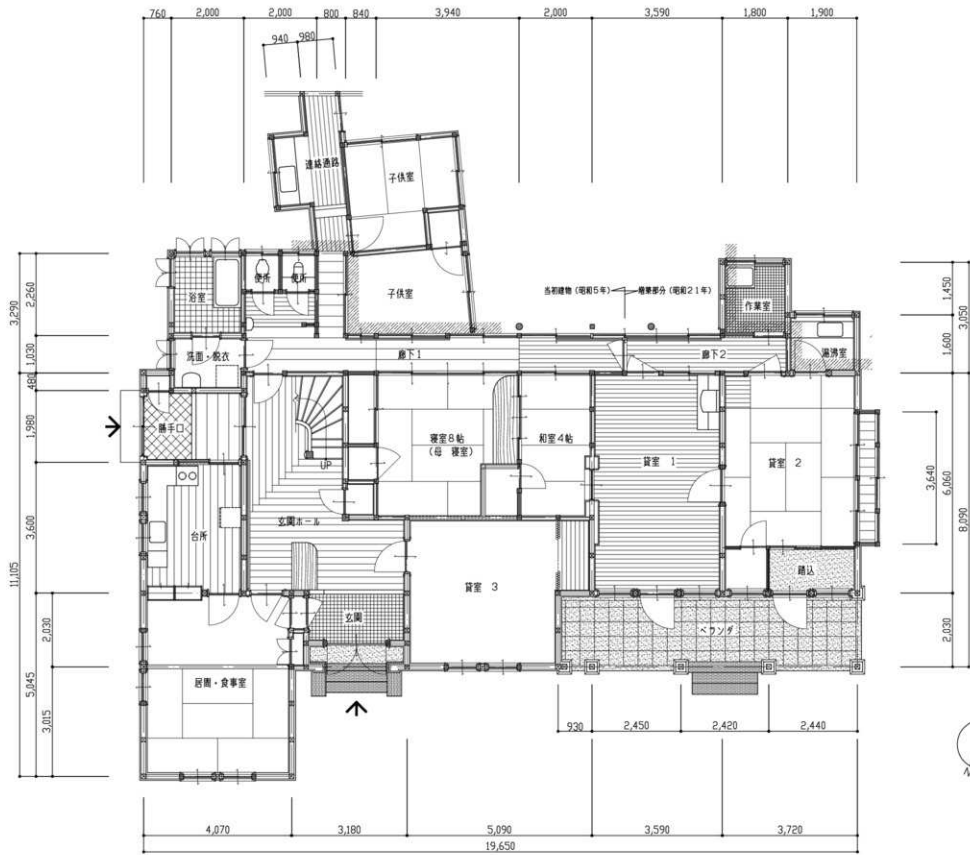
500m 0 500m 1000m 1500m



- 国指定 (史跡・名勝・天然記念物・建造物)
- 国登録有形文化財 (建造物)
- 県指定 (建造物)
- 市指定 (名勝・天然記念物・建造物)

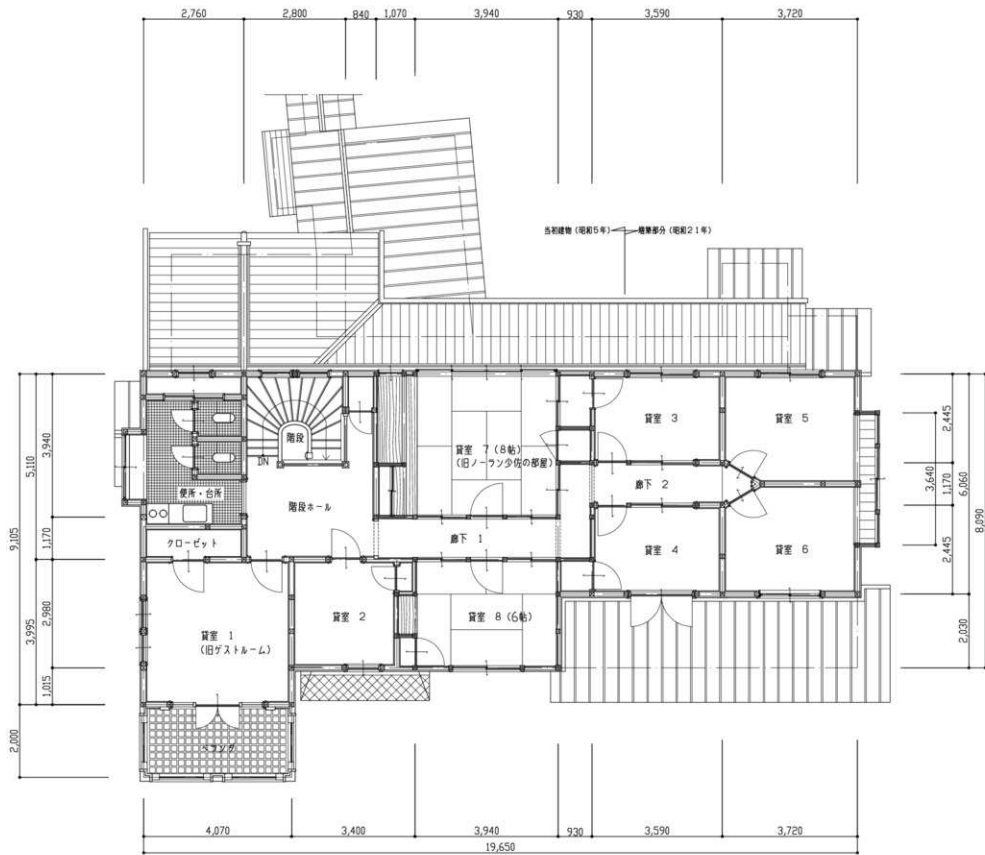
所在地 (1:25000) 1





凡例  昭和29年以降増築

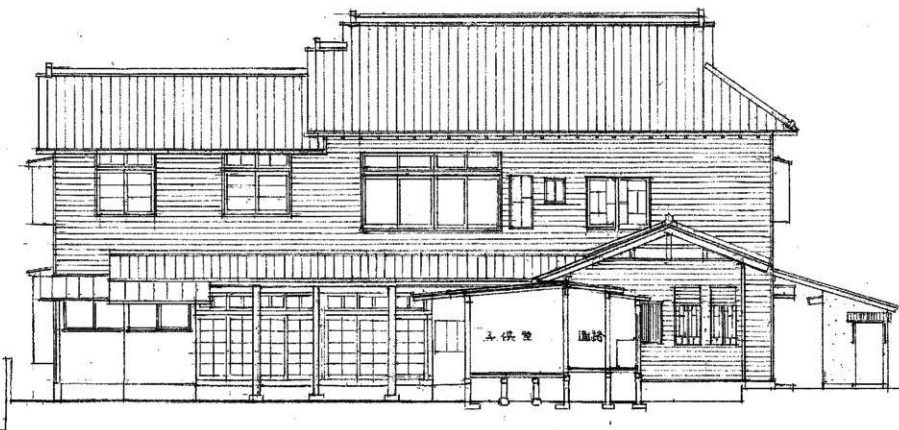
1 階平面図 1:100 3



2階平面図 1:100 4



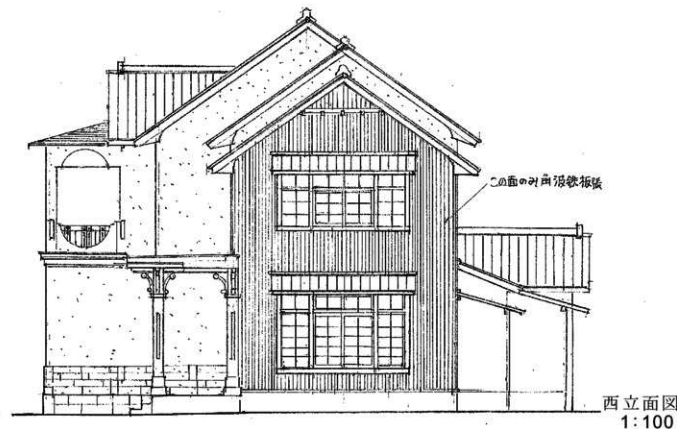
北立面图
1:100



立面图
1:100

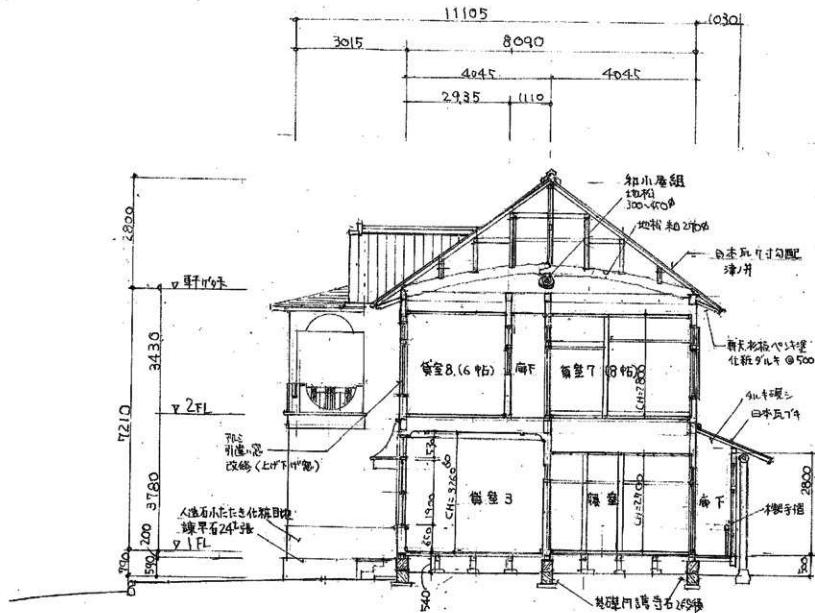
立面图 1	1:100	5
-------	-------	---

東立面図
1:100

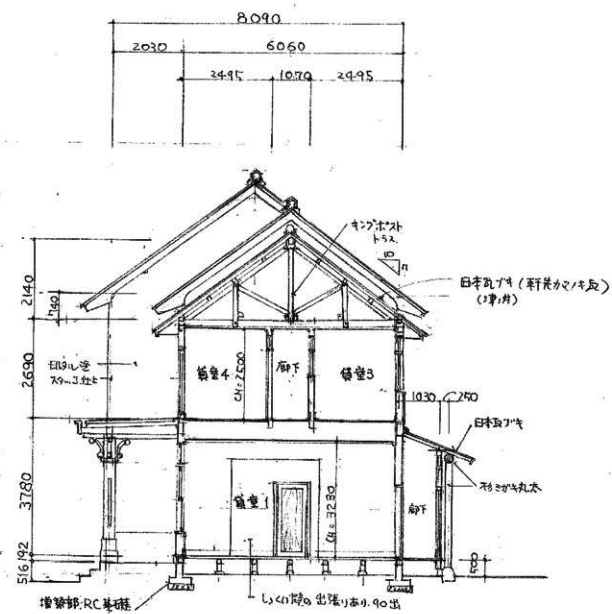


西立面図
1:100

立面図 2 1:100 6



当初建物SECTION 1:100 (昭和5年)



増築部分SECTION 1:100 (昭和21年)

断面図 1:100 7

外部仕上

屋根	津ノ井瓦土葺、増築部：同様（但し軸葉薄がけ）
ベランダ屋根	亜鉛鉄板瓦葺き、玄関庇：銅板葺き（150×150）
外壁	モルタル塗 ドイツ壁仕上 白ベンキ塗 一部杉板下見板張
開口部	内外共 木製建具 後に一部アルミ建具へ改修
塼	石風人造石小タキ仕上 H=800 化粧目地 白ベンキ塗
基礎	円護寺石2段積・見え掛り 護早石24t張り
床下換気口	床下換気口 鉄製特注品 240×360
軒天	杉板張 化粧垂木白ベンキ塗 増築部は杉板張 ベンキ塗
1Fベランダ	床モルタル化粧目地・軒天漆喰塗 裝飾柱頭飾り
2Fベランダ	軒天檜板張OS、手摺スチール製裝飾金物（帯銅）

内部仕上

1F

室名	床	巾木	腰	壁	天井
玄関	150角タイル張	——	磁器タイル張	漆喰塗	板張 OP（一部化粧梁） CH=3,350
玄関ホール	樺板 300W	樺H=180	樺板張OS、950H	漆喰塗	板張 OP（一部化粧梁） CH=3,350
寝室（8帖）	タタミ敷	木製H=150	——	漆喰塗 一部合板AFP	杉 竿縁天井 CH=3,200
和室4帖	タタミ敷	木製OS	——	漆喰塗 一部合板AFP	杉 竿縁天井 CH=2,700
居間・食事室	タタミ一部カーペット	木製OS	——	漆喰塗	檜板格子 化粧天井OP CH=2,700
台所	板張	木製OS	——	合板OP仕上	杉 竿縁天井OP CH=3,300
貸室 1	杉床板フローリング	木製H=150	——	漆喰塗	漆喰塗 ボーダー仕上 CH=3,230（セーリング）
貸室 2	タタミ敷	木製H=150	——	漆喰塗	漆喰塗 ボーダー仕上 CH=3,230
貸室 3	カーペット敷	——	漆喰油性ベンキ	漆喰塗 一部化粧張	裝飾天井 OP CH=3,265（セーリング）
階段	モルタル塗	木製H=150	——	漆喰塗	漆喰塗 ボーダー仕上 CH=3,230
浴室	150角磁器タイル	——	モザイクタイル	モザイクタイル12□	檜板張OS斜天井 CH=2,840（電気風呂）
洗面・脱衣	フロアシート	75角タイル2枚150H	——	漆喰塗	檜板張OS斜天井 CH=2,500
便所（和・洋）	モザイクタイル	——	半磁器タイルH=800	漆喰塗	檜板張井桁組 CH=2,840 通気
廊下1	樺板張	木製	——	漆喰塗	屋根下地表し CH=2,660、2,930
廊下2	桧板張り	木製	——	漆喰塗	屋根下地表し
階段	樺 蹴込、ササヲ共	樺H=150	——	漆喰塗	檜板張OS井桁組 賛板病院より移設
勝手口	敷瓦四半敷	木製	プリント合板	合板OP仕上	杉 竿縁天井OP CH=2,560、3,330
湯沸室	フロア—	——	ステンレスH=1120	ボード OP	杉板張
作業室	モザイクタイル	——	100角タイルH=630	モルタル塗	合板張

2F

室名	床	巾木	腰	壁	天井
貸室 1	カーペット敷	木製H=150	——	漆喰塗	意匠格子組天井板張 OS CH=3,390、3,140
貸室 2	カーペット敷	木製H=150	——	漆喰塗 OP	板張OS CH=3,230
貸室 3	カーペット敷	木製H=190	——	漆喰塗	漆喰塗 ボーダー仕上 CH=2,550 セーリング
貸室 4	カーペット敷	木製H=190	——	漆喰塗	漆喰塗 ボーダー仕上 CH=2,550 セーリング
貸室 5	カーペット敷	木製H=190	——	漆喰塗 一部断熱ボード	漆喰塗 ボーダー仕上 CH=2,550 セーリング
貸室 6	カーペット敷	木製H=190	——	漆喰塗 一部断熱ボード	漆喰塗 ボーダー仕上 CH=2,550 セーリング
貸室 7（8帖）	タタミ敷	タタミヨセ	——	漆喰塗 一部聚楽	杉板合板竿縁 （杉玉老板） CH=2,800
貸室 8（6帖）	タタミ敷	タタミヨセ	一部合板板張OS1200	漆喰塗	杉板合板竿縁 CH=2,800
階段ホール	カーペット敷	木製H=150	——	漆喰塗	井桁組 板張OP CH=3,390
台所・便所	モザイクタイル	——	モザイクタイルH=1000 一部2400	合板張 OP	板張 OP CH=3,210
廊下1	カーペット敷	木製H=50	合板張OS H=1200 木押え縁	漆喰塗	杉板合板竿縁天井 一部漆塗（吹雪） CH=2,500
廊下1	カーペット敷	木製OS H=50	合板張OS H=1200 木押え縁	漆喰塗	漆喰塗 CH=2,500

仕上表

8

(6) 写真



北面外観



南面外観 (山側)



当初建物東面外観



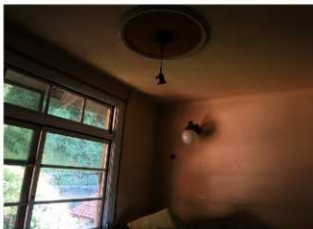
玄関から螺旋階段



螺旋階段



玄関タイル・樺板張り廊下



2階洋間センターリング



唐草 瓦の因幡瓦紋 (津ノ井)



当初倉庫木製扉



人造石洗出し蛇腹の緻密なデザイン



ダンスール非常口サイン



1階へラック柱頭飾り



電気室から当初建物への引込電源
当時大容量の引込をしていた



当初建物切妻部
破風板のデザインと持ち送り梁の化粧も優れている



2階廊下の間仕切・明り取り

(6) 建築の特徴

1. 外観の特徴

当初建物はL字型の平面を持ち、玄関へのアプローチを誘引して同時に北側に突き出たベランダ（2階部分）を際立たせ、さらに日本瓦の切妻屋根を崩す事で特に正面からの洋館を意識したものと思われる。

それにしても、このベランダの手摺壁を半円形にくり抜き、その中に帯鋼で紋様を組込み、ゲストルームのアールの開口を下から見上げる空間構成は豊かである。

外壁は粗モルタルでドイツ壁調に仕上げられ、縦長の上げ下げ窓がバランス良く配されている。屋根は津ノ井瓦で葺かれ7寸と急勾配である。

庇や軒の出は短く、軒裏は化粧垂木と杉板張りで壁と同じ白く塗装がなされている。全体的に南欧風ベランダコロニアル方式に和瓦を着せ替えた擬洋風建築ともとれる。しかし、明治初期に流行したデコデコの擬洋風とは一線を画しどことなく優雅さをもっている。

一方16年後に進駐軍により増築された部分は、イギリス、北欧の民家の様式でテキサスの自邸に似せたベランダ付の洋館をくっつけた感がぬぐえない。

このベランダは初期のものとは違ってデザインに差異があるが、外壁を板張りではなく（南西面を除く）同じモルタルスタッコ調に合せ、腰のスクラッチタイルは初期の人造石洗出しに連続している。様式の異なったベランダは前庭の木々や時の経過によって、正面ファサードを長くすることで妻側の意識を消しながら、違った空間を演出しているように思える。



北面外観



2階ベランダ窓と手摺

2. 大工 橋山義治

茶町の大工橋山義治（明治20年生れ～昭和37年頃）は父甚平（桶屋町）の四男で、五男の弟定次郎（後に桶屋町 白田定次郎、明治23年～昭和11年）と共に大工として身を立てている。兄義治はこの佐々木家の仕事を終えた後、鳥取武徳殿（昭和5年～6年）の大工仕事にも加わったようだと言井さんの親族に伝えられている。

義治は40才でこの佐々木邸に係わる事となるが、大工としては若くはない。そのかわり技量や弟子達を統率するには丁度良い年齢と思われる。医学を専攻した長女の為に、洋館の医院を造りたいとの善政氏の意向を聞き洋館への興味もあつてか、京都での1年間の修行も貪欲に吸収したものである。

3. 大工仕事

初期の建物は土壁小舞下地で外壁が作られ、階高も高くその上に瓦葺きである為、地震の力を大きく受ける事となる（重量大）。昭和18年の鳥取大地震の影響で建物も前方側に少し傾いている。瓦の一部修繕や間仕切の一部作り替えなどの被害しかなかった事を考えると、大工仕事の確かさを物語っていると思われる。基礎石の円護寺石の下にはコンクリートで基壇を造り、さらに壁量も比較的多くてこの程度の被害ですんだと思われる。

2階ゲストルームからベランダに繋がるアールの開口部の棧組のバランスの良さや、移設された螺旋階段の漆喰とケヤキの仕舞方、又1階廊下の床板で巾1尺、長さ2間～2.5間のケヤキ板が85年経った今でもくるいがほとんど見られない。窓や出入り口の広い額縁の面取りも一様でなく、天井の化粧格子のデザインにも力が注がれている。



ゲストルームからベランダに通じる開口部

4. 左官のこと

この洋館を際立たせているものの一つが左官仕事と思われる。外壁のドイツ壁とベランダのきめ細かな人造石洗い出しの蛇腹、そして、腰の人造石目地切掻き落し仕上げ等である。内部の漆喰塗と合わせて、左官職人の技術には確かさが感じられる。工事に携わったのは智頭の左官職人集団か、京都の方から連れてこられた職人なのかははっきりしないが、津ノ井瓦の福田勝美氏によると屋根瓦を葺いたのは智頭の土居左官だと思っていると話されている。



2階へ「ラタ」手摺と蛇腹



玄関化粧柱とまぐさのストライプ

5. 建具のこと

木製の上げ下げ窓が85年経過し、木枠の一部が腐れかけているが、それでも何とか可動出来るということは驚きだ。便所、浴室の窓の格子デザインや桧の枠でケヤキの1枚鏡板もしっかりした造りで縦楕円の中抜きガラスのバランスも良い。又、部屋によって、木製の組子のデザインが和と洋を意識しながら決められている。



応接室上げ下げ窓デザイン

6. 瓦のこと

当初の建物、増築部分共屋根瓦は津ノ井瓦の土葺きとなっている。当初の棟は登り京箱で角っぼい表情がある。鬼瓦には佐々木家の家紋が施され、さらに唐草と巴にも因幡瓦の紋とベランダの手摺にも使われた厄除けの紋様が施されている。



智頭木ノ原佐々木家家紋



洋館鬼瓦と巴



浴室開き窓

7. 飾り金物他

ベランダのモルタル腰壁を半円形にくり抜き、帯鋼の格子が上手にはめ込まれている。

直線で構成された中に、この地方に多い「どんどろけ」か、もしくは厄除けの竜を表したものかもしれない。この形は津ノ井瓦の巴にも残されていて興味深い。又、飾物の床下換気口（下写真）は建具のデザインにも共通のコードが用いられている。

この他に、玄関扉で斜め3本の真鍮パイプ手摺は直線ですっきりとしたデザインである。さらに玄関の銅板屋根は5寸角の菱葺きで、せり上がるように葺かれ隅の上側頂部に二重の凸丸が左右に仕込まれている。



ベランダ手摺金物



床下換気口



玄関庇銅板菱葺き

8. 構造のこと

当初の建物は洋館として形どりに、1階の階高を3.7m、2階も3.4mで通常の日本家屋に比べ、1.7m程高くなっている。市内の旧病院の廻り階段を移設した為、その階高に合せたとも考えられる。

基礎は円護寺石の二段積で、その下にコンクリートが施工されている。土台は栗の4寸5分角、柱は杉と桧が使われている。(4寸5分角)和小屋の小屋組みには杉と松の丸桁が多く用いられ、瓦葺きの屋根は7寸勾配と急である。金物はほとんど見られず多くは込桧が使用されている。増築部はRC基礎で桧の土台、柱、桁類(2階床組)も小さく小屋組みはキングポストトラスとなっている。2階の階高を低くして壁量もあり、材料は良材ではないが動きは少ない。

(戦後の物資が不足している時期でもあり、基礎にクラックが見られ、桧の土台も白蟻の被害が発生している)



当初建物、和小屋
(金物が使用されていない)



増築部洋トラス (キングポストトラス)

9. 進駐軍に接収された時（戦後）のこと

- 外部からの侵入を防ぐ

敷地の周囲には有刺鉄線が張られ、外部からの侵入を防ぐとともに、夜間には高圧電流が流されていた。

- ダンスホールのこと

昭和24年頃から28年頃まで使われた部屋は玄関ホールに受付があり、右手の応接室、その奥には12帖大の洋間が有り、2室は間仕切りを取り外されダンスホールとして使われた。長いカウンターが置かれ、客のコートや持ち物のクローゼットも用意されていた。又、応接室に入って右側に楽団の演奏の為のステージもあったという。



ダンスホールに使用された部屋

- 踊り子の絵のこと

ダンスホールに使われた室の正面の漆喰壁には、見上げるような位置に金髪で裸の踊り子が星印のブラジャーを身にまとい、情熱的に踊る姿が描かれている。絵の上手な将兵が描いたものらしい。年代がよく分らないが利用客の一人で、2代目万年筆博士の山本氏の話では、両親が時々ハワイトローズに出かけると言って楽しみにしていたという。



踊り子壁画

- ノーラン少佐の部屋（2階和室8帖）には

日本の竹が好みであったらしく、トコの落し掛けに竹が使われ、木製の床柱が孟宗竹に似せて、繊細に加工され今でも黒光りしている。又、おそらくこの部屋の入口に使われたと思われる竹製の開き扉が、今でも1階の子供室に残っている。



床の間

(6) 保存上の留意事項

建物全体は健全性を保っているが、経年劣化等により修復を必要とする箇所も生じている。今後、文化財の保存の為に特に留意が必要な事項について下記にまとめた。

① 増築部の瓦屋根の修復を要する。

既存瓦を調査し、使用不可能な瓦については他の古い瓦を調達する。全体の瓦土を撤去し、新しい葺土で葺き替えを行う。(3段ごとに瓦留め)(約70%程度の瓦が再使用可能と思われる)。

② 当初建物の屋根谷部及び当初建物と増築部との取合に一部雨漏りが見られる。

③ 当初建物玄関底の銅板菱葺き(木下地共・特に庇鼻)が劣化している。

④ 増築部ベランダ天井の漆喰に剥離(5㎡程度)が生じている。

⑤ 当初建物の腰に張られている「諫早石」が10枚程落下及び剥離しつつある。

⑥ 床下換気口廻りの人造石研ぎ出しに劣化が見られる。

⑦ 軒天の一部杉板に劣化・破損が生じている。

⑧ 軒樋・堅樋の一部、木製建具周囲のシール、水切り鉄板他、外壁クラックシール等、防水関係の補修が必要である。

⑨ 床下の土台部分に蟻害が発生している。

【所見】

1. 文化財としての評価

調査報告書にある通り、本建造物は

① 当初建築部分

② 昭和20年以降の増築部分

を主な構成要素としている。

このうち、①は昭和2年に計画され昭和5年に完成した、洋風の意匠・内装を取り入れた木造建築である。洋風の意匠をもつ建築物としては重要文化財仁風閣（明治40年）に次いで古く、江戸時代から現代への過渡期の城下町・鳥取の建築文化の貴重な資料となっている。昭和18年の鳥取大震災以前に竣工しており、同種の建造物としては中心市街地では最古の現存例と考えられる。なお、同時期の住宅建築として、登録有形文化財五臓圓ビル（鉄筋コンクリート建築）、登録有形文化財桜寛苑（旧金田市長邸）（近代和風建築）が現存している。

枋窟にあった長田神社の移転後、その土地を取得し、鳥取市公会堂の対面に建築されており、当初は医院として計画されたものである。室内に、先行建築から移築されたとされる支柱のない螺旋階段をもっており、若干改変されているものの、内・外部とも当初の姿をよく残している。①はL字型の平面を持ち、玄関へのアプローチを誘引して同時に北側に突き出たベランダ（2階部分）を際立たせ、さらに日本瓦の切妻屋根を崩す事で特に正面からの洋館を意識したものと思われる。このベランダの手摺壁を半円形にくり抜き、その中に帯鋼で紋様を組込み、ゲストルームのアールの開口を下から見上げる空間構成としている。

外壁は粗モルタルでドイツ壁調に仕上げられ、縦長の上げ下げ窓がバランス良く配されている。屋根は津ノ井瓦で葺かれ、7寸と急勾配である。

庇や軒の出は短く、軒裏は化粧垂木と杉板張りで壁と同じ白く塗装がなされている。全体的に南欧風ベランダコロニアル方式に和瓦を着せ替えた和洋折衷建築ととれる。明治初期に流行した擬洋風とは一線を画し、どこことなく優雅さをもっている。内装のペンキ仕上げは、進駐軍が接収した住宅に共通して施工したもので、この建築の歴史を示している。

市域においては、同時期の建築で他に残された類例は見いだせず、特異で価値ある建築であると考えられ、鳥取市の中心市街地の、城下町から近代都市への移行と建築物の関係を知るうえでも貴重な遺構である。

②は、終戦後進駐軍が将校の宿舎として使用した際に増築した部分である。外部は当初建築との整合を一応意識したもので、米軍将校の生活に合わせて建築・設備が設計されている。①部分が和小屋なのに対して、②部分はキングポスト・トラスの小屋組みとなっている。

進駐軍のノーラン司令官のテキサスの自邸に似せたベランダ付の洋館を、①に

後付した格好である。間取り等、全体としては進駐軍宿舎（デペンデント・ハウス）として構成されていると思われるが、ペランダのメキシカン・オーダーの柱頭は、進駐軍のデペンデント・ハウスの設計規範には含まれておらず、本建築に独自のものと考えられる。

このペランダは、初期のものとはデザインに差異があるが、外壁を板張りではなく（南西面を除く）同じモルタルスタッコ調に合せ、腰のスクラッチタイルは初期の人造石洗出しに連続している。様式の異なったペランダは前庭の木々や時の経過によって、正面ファサードを長くすることで妻側の意識を消しながら、違った空間を演出している。

進駐軍の宿舎として建造された建造物として、市域内に保存されている例はほかに知られておらず、貴重な例であるとともに、占領期の地域の状況を知るうえで重要な歴史的資料である。

本文化財は、日本建築の外観・内装に洋風の意匠を取り入れた当初部分（市中心市街地では仁風閣に次いで建築年代の古い）に、占領期の洋式の構造をもつ外国人宿舎が増築されたものである。増築部分についても、意匠面等に固有の意匠が加えられており、他の建築物に見られない特徴を有している。建築的特徴とともに、地域の歴史的経過を示す建築物であり、市指定文化財として現状の建造物の価値・資料的価値を保存する必要がある。

2. 保存・活用に係る評価

所有者は、当該文化財の保存を望んでおり、現在は遠隔地（大阪府）に居住しているが、借業者が代行して日常的管理を行っている。

鳥取市歴史博物館、鳥取東照宮（重要文化財楞谿神社本殿・幣拝殿並びに唐門）に隣接しており、上町地区のランドマークとなっている。以前はタウン誌の編集や文学フォーラムの事務局などとして間借りされていたこともある。

現在アトリエとして貸し出されている2室を除き、整理・清掃等を行うことで主要部分は公開可能な状況である。

文化財指定後は、常時公開は難しいが、建造物の特別公開、また、文化財・文化イベント等での活用について取り組むことが可能と考えられる。

3. 現状と当面の課題

全体的には健全な状態だが、経年劣化が進行しつつある。

長期的な保存のためには、当面は雨漏りや軒の腐朽等、部分的な修理が必要である。また、平成26年度に白蟻が発生していることが確認されたため、早急に防除が必要である。

以上のことから、市指定文化財として指定し、当該文化財の適切な保護を図る必要があると考える。

（文化財専門員 佐々木孝文）

鳥取城調査研究年報 第9号

平成28年3月31日発行
編集・発行 鳥取市教育委員会
印刷 総合印刷出版株式会社